



2026年10月2日

タレンツ・トーキョー実行委員会

映像分野の人材育成事業「タレンツ・トーキョー2026」参加者・メイン講師決定  
世界展開が期待される企画を選抜する「ネクスト・マスタース・サポート・プログラム」対象企画を発表  
「タレンツ・トーキョー2026」プレイベント・修了生作品特別上映会 開催概要を発表

タレンツ・トーキョー実行委員会は、東京における映像分野の創造・発信を強化するため、「次世代の巨匠」になる可能性を秘めた「才能（＝Talents、タレンツ）」を育成することを目的とした「タレンツ・トーキョー」を、東京都及び公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京との共催で2010年から毎年秋に実施しています。アジアの若手映画作家やプロデューサーを東京に招き、7日間にわたるワークショップを通じて、世界で活躍していくためのノウハウを学ぶ機会を提供する人材育成事業です。また、本事業は「ベルリン国際映画祭」の一環として開催されている「ベルリナーレ・タレンツ」の海外展開における唯一のアジア版として実施するもので、カンヌやヴェネツィアなどの国際映画祭で受賞する修了生も多く、世界的に活躍する映画人を多数輩出しています。

17回目となる「タレンツ・トーキョー2026」は、「物語がはじまる、その手前で（*The Suspended Steps of Storytellers*）」というテーマのもと、11月23日（月・祝）～11月29日（日）の日程で行います。一般公開となる公開プレゼンテーションも実施予定です（取材・観覧には事前登録が必要です。公開日に関する詳細は後日お知らせします）。

※詳細は別紙1～2をご参照ください。

この度、選考の結果、17名の参加者（タレンツ）が決定しました。メイン講師には、以下の、世界で活躍するプロフェッショナル4名を迎えます。映画監督のミディ・ジー氏、プロデューサーのタン・シーエン氏、ワールド・セールス担当講師としてオラ・ビシュク氏、ベルリナーレ・タレンツからクリスティーナ・ユスト氏。

※詳細は別紙3をご参照ください。

また、本事業の修了生を対象とし、今後世界展開が期待される企画を選抜しサポートする「ネクスト・マスタース・サポート・プログラム」の対象企画も決定しましたので、あわせてお知らせします。

「タレンツ・トーキョー2026」に先立ち、プレイベントとして、「タレンツ修了生作品特別上映会」を11月6日（金）～8日（日）に、東京都写真美術館ホールにて開催します。上映作品は、『ひとり死ぬのはイヤだから』（2024）ジャヌス・ヴィクトリア監督（TT2013修了生）、『春行』（2023）ワン・ピンウェン監督（TT2019修了生）、『沈黙の自叙伝』（2022）マクバル・ムバラク監督（TT2025修了生）の3本で、上映後の監督Q&Aも予定されています。加えて、11月8日には、小田香監督（TT2015修了生）、曾我満寿美プロデューサー（TT2011修了生）を、モデレーターに東京国際映画祭プログラマーの清水裕さんを迎えたクロストークも予定されています。

※詳細は別紙4をご参照ください。

※ 本事業は、2010年は「ネクスト・マスタース・トーキョー」、2011年から2013年は「タレント・キャンパス・トーキョー」、2014年より「タレンツ・トーキョー」の名称で実施しています。

## 「タレンツ・トーキョー2026」開催概要

名称：「タレンツ・トーキョー2026」（Talents Tokyo 2026）

会期： 2026年11月23日（月・祝）～ 29日（日）  
※11月 27日（金）「公開プレゼンテーション」予定  
取材及び観覧の事前登録に関する詳細は後日発表

会場： ビジョンセンター有楽町（東京都千代田区有楽町1-5-1日比谷マリンビル 3F）  
有楽町朝日スクエア（東京都千代田区有楽町2-5-1有楽町マリオン11F）

主催： 東京都  
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京  
タレンツ・トーキョー実行委員会

提携： ベルリン国際映画祭（ベルリナーレ・タレンツ）

協力： ゲーテ・インスティトゥート東京

公式ウェブサイト：<https://talents-tokyo.jp/>

### ＜本事業の掲載に関するお問い合わせ＞

タレンツ・トーキョー実行委員会事務局 担当：曹、山下

E-mail：[talents@talents-tokyo.jp](mailto:talents@talents-tokyo.jp)

## 別紙1 「タレンツ・トーキョー2026」メイン講師（エキスパート）



© Juliana Photography

© Peter Kreibich

（左から、ミディ・ジー氏、タン・シーエン氏、オラ・ビシュク氏、クリスティーナ・ユスト氏）

### ミディ・ジー（Midi Z）／映画監督

ミャンマー出身、台湾を拠点に活動する映画監督。16歳で台湾へ移住し視覚コミュニケーションデザインを学んだ後、無脚本・最小限のクルーによる超低予算映画三部作で長編デビュー。長編第1作『リターン・トゥ・ビルマ』（2011）を皮切りに、カンヌ、ヴェネツィア、ベルリン、アムステルダム（IDFA）、東京といった数々の主要国際映画祭で作品を発表し続けている。

2024年の監督作『チャオ・イェンの思い』は東京国際映画祭コンペティション部門に選出されたほか、中国で公開初週に2,500万米ドルを超える興行収入を叩き出し、商業的にも大きな成功を収めた。劇映画とドキュメンタリーの双方を横断しながら、一貫してアイデンティティや流浪（ディスプレイスメント）のテーマを追究しており、最新作『The Exiles（原題）』では自身初となる英語作品に挑んでいる。

### タン・シーエン（TAN Si En）／プロデューサー

シンガポールを拠点に活動する映画・TVプロデューサー。映像制作会社「Momo Film Co」創業者。「ACE」、「ベルリナーレ・タレンツ」、「ロッテルダム・ラボ」などの国際的な育成プログラムの修了生。

アンソニー・チェン監督『熱帯雨』（2019/第93回アカデミー賞シンガポール代表）、ネルソン・ヨー監督『Dreaming & Dying（原題）』（2023/ロカルノ国際映画祭 黄金豹賞2冠）、ズオン・ジェウ・リン監督『Don't Cry, Butterfly（原題）』（2024/ヴェネツィア国際映画祭批評家週間グランプリ）など、話題作・受賞作の制作・共同制作を数多く手がける。

近年の国際共同制作作品に『ユースフル・ゴースト』（2025/カンヌ国際映画祭批評家週間グランプリ）、『ナギダイアリー』（2026/カンヌ国際映画祭コンペティション部門出品）などがある。現在はダニエル・フィ監督『Other People's Dreams（原題）』等のプロデュースを手がけている。

## オラ・ビシュク (Ola BYSZUK) / ワールド・セールス

ポーランド出身、フランスを拠点に活動。パリの国際セールス会社Lucky Number共同設立者。これまで国際セールスおよびプロデュース分野で長年のキャリアを持ち、mk2 Filmsの国際セールスSVP（2015～2021）や、フランスの製作会社Nord-Ouest Filmsの国際共同製作プロデューサー（2022～2024）を歴任。カンヌ国際映画祭監督週間に選出されたカーソン・ランド監督『さよならはスローボールで』（2024）や、ヴェネツィア国際映画祭オリゾンティ部門出品のプッティボン・アルンペン監督『The Burning Giants』（2026）などを手がけた。

2024年に設立したLucky Numberでは、世界的訴求力を持つ野心的な作家映画をブティック型（年間約10本厳選）で展開。ガブリエル・マスカロ監督『ブルー・トレイル』（2025/ベルリン国際映画祭銀熊賞）や、アンマリー・ジャシル監督『パレスチナ36』（2025/東京国際映画祭グランプリ）、SABU監督『Arrested Memory（原題）』（2026/ヴェネツィア国際映画祭出品）など、国際映画祭で高く評価される作品を世界へ発信している。

## クリスティーナ・ユスト (Christina JUST) / ベルリナーレ・タレンツ

「ベルリナーレ・タレンツ」のプログラム開発および運営責任者。2019年に同プロジェクトへ参画後、ワークショップ・プログラムの再編をはじめ、公開トークやネットワーキングイベントのキュレーション、全体の進行統括を一貫して手掛ける。

演劇分野のドラマトゥルギーや教育職でキャリアを始め、ノルウェーの劇団での翻案・翻訳業務や名門ザルツブルク音楽祭の舞台監督助手を長年務めるなど、舞台芸術領域でも精力的に活動。2016年から2019年には、ベルリン国際映画祭の特別部門「NATIVe－先住民族映画への旅」のコーディネーターとして、先住民族の映画作家による新作および回顧展作品の紹介に尽力した。欧州文学の修士号、スカンジナビア研究およびドイツ文学の学士号を所持している。

## 別紙2 「タレンツ・トーキョー2026」参加者（タレンツ）

### 監督：

HU Guo（中国）  
JIANG Xiaoxuan（中国）  
Michelle ZHOU（中国）  
YUNG Tsz Hong（香港）  
Lamtiar Simorangkir（インドネシア）  
MIYAHARA Takuya / 宮原 拓也（日本）  
MORI Arata / 森 あらた（日本）  
SAKAMOTO Yukari / 坂本 悠花里（日本）  
Lay Thida（ミャンマー）  
Moe Myat May Zarchi（ミャンマー）  
Cris BRINGAS（フィリピン）  
Shoki LIN（シンガポール）  
LIANG Hong-Kai（台湾）  
Tanasetth TULYATHAN（タイ）

### プロデューサー：

Kristine DE LEON（フィリピン）  
Joyce CHOU（台湾）  
Samavee PUMMUANG（タイ）

- \* 国名／地域名のアルファベット順で表示しています。
- \* 国名／地域名は出身国もしくは現在の活動拠点です。
- \* 2026年10月2日時点の情報であり、変更になる可能性があります。

最終選考委員会は、池田高明（NHKエンタープライズ）、市山尚三（タレンツ・トーキョー実行委員長／東京国際映画祭 プログラムディレクター）、神谷直希（東京フィルメックス プログラムディレクター）により構成されています。

一次選考には、筒井龍平（プロデューサー、TT2013修了生）、今井太郎（プロデューサー、TT2018修了生）、水野詠子（プロデューサー、TT2019修了生）、中西舞（監督、TT2023修了生）、佐藤菜穂美（プロデューサー、TT2025修了生）、深津純子（ライター／東京フィルメックス理事）、市山尚三、松本元子（タレンツ・トーキョー事務局）が参加しました。

（順不同、敬称略）



## 別紙3 ネクスト・マスターズ・サポート・プログラム対象企画

### A) 企画開発ファンド

作品の実現のため、企画開発中のプロジェクトへ上限150万円を支援するプログラム

Mouly Surya (監督、TT2010、インドネシア) 『The Wife Who Can See Dead People (or Jinn)』  
Sorayos PRAPAPAN (監督、TT2015、タイ) 『Zoo Season』  
YEO Siew Hua (監督、TT2015、シンガポール) 『Silence Once Begun』  
ZHOU Hao (監督、TT2018、中国) 『All Fixed Up』  
Yulia Evina Bhara (プロデューサー、TT2020、インドネシア) 『Unholy』  
YAMASHITA Momi / 山下つばみ (監督、TT2021、日本) 『Autumn Ripens』  
SINN Kirin (監督、TT2023、韓国) 『Maiden Home』  
Alvin LEE (監督、TT2024、シンガポール) 『Talk To Me When You Are Dead』  
LAU Kok Rui (監督、TT2024、マレーシア) 『Wake Me Up When The Mourning Ends』  
Glenn BARIT (監督、TT2025、フィリピン) 『Luzonensis and Floresiensis』  
NGUYỄN Lương Hằng (監督、TT2025、ベトナム) 『Summer 1999』  
Sam MANACSA (監督、TT2025、フィリピン) 『The Void is Immense in Idle Hours』  
Sean Ali WANG (監督、TT2025、中国) 『Pratopia』  
Sushi KUWAYAMA / 桑山 篤 (監督、TT 2025、日本) 『Home-work』  
ZHENG LU Xinyuan (監督、TT2025、中国) 『A Stranger at My Door』

### B) インターナショナル・プロモーション・ファンド

完成した、もしくは完成間近の作品の広報費用などのため、上限50万円を支援するプログラム

MO Jinjin (プロデューサー、TT2016、中国) 『Fuxi: Four Tales of Feasting』  
Sompot CHIDGASORN PONGSE (監督、TT2018、タイ) 『9 Temples to Heaven』  
MURAYAMA Kazuya / 村山 和也 (監督、TT2023、日本) 『The Ballet Lesson (バレエレッスン)』  
Ivy Yu-Hua SHEN (プロデューサー、TT2024、台湾) 『KAKTARUA』

\* 修了生氏名(監督/プロデューサー、タレンツ・トーキョー修了年、国名/地域名)『企画名』で表示しています。

\* タレンツ・トーキョー修了年及び氏名アルファベット順で表示しています。

\* 国名/地域名は出身国もしくは現在の活動拠点です。

\* 2026年10月2日時点の情報であり、変更になる可能性があります。

最終選考委員会は、池田高明(NHKエンタープライズ)、市山尚三(タレンツ・トーキョー実行委員長/東京国際映画祭 プログラムディレクター)、神谷直希(東京フィルメックス プログラムディレクター)により構成されています。

一次選考には、市山尚三、神谷直希、松本元子(タレンツ・トーキョー事務局)、曹瀟瀟(タレンツ・トーキョー事務局)が参加しました。

(順不同、敬称略)



別紙4 「タレンツ・トーキョー2026」プレイベント  
「タレンツ修了生作品特別上映会」・開催概要



名称：「タレンツ・トーキョー2026」プレイベント・タレンツ修了生作品特別上映会

会期：2026年11月6日（金）～8日（日）

会場：東京都写真美術館ホール

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、  
タレンツ・トーキョー実行委員会

チケット：無料（要事前申し込み、詳細は後日公式ウェブサイトにてお知らせします）

公式ウェブサイト：<https://talents-tokyo.jp/>

## | 上映作品 |

### 『ひとりで死ぬのはイヤだから』（2024）



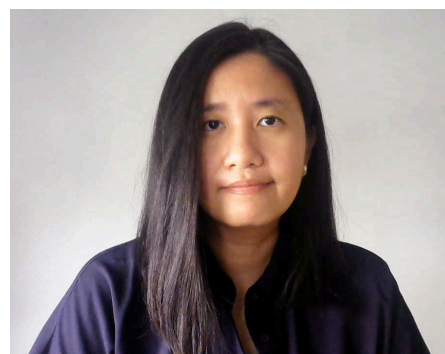
© 2027 「Diamonds in the Sand」 Film Partners

2024年 / 102分 / 日本・マレーシア・フィリピン / 日本語・英語・タガログ語 / カラー / 1:1.85（アメリカンビスタ） / 5.1ch / 日本語字幕

東京でひとり暮らしを送るサラリーマンのヨージは、唯一気にかけてくれていた母を亡くし、天涯孤独となる。そんな折、近隣で起きた孤独死を目の当たりにし、「こんなふうに孤独に死にたくない」と強く思う。そして母の最期を看取ったフィリピン人看護師ミネルヴァの「フィリピンには孤独がない」という言葉を胸に、単身マニラへと向かうのだった…。

#### 監督/脚本：ジャヌス・ヴィクトリア（TT2013修了生）

フィリピン・マニラを拠点とする脚本家・監督。アジア・フィルム・アカデミー（AFA）およびタレンツ・トーキョー2013を修了。これまでに短編7作品を監督し、『ひとりで死ぬのはイヤだから』（2024）が長編デビュー作となる。同作は2013年のタレンツ・トーキョー・アワードを受賞した企画で、2025年にはウディネ・ファーイースト映画祭でホワイト・マルベリー賞を受賞した。



#### 上映スケジュール

11月7日（土）15:35- \* Q&A：ジャヌス・ヴィクトリア監督、曾我満寿美プロデューサー

11月8日（日）13:00- \* Q&A：ジャヌス・ヴィクトリア監督、曾我満寿美プロデューサー

## 『春行』（2023）



2023年 / 90分 / 台湾 / 台湾語（閩南語）、中国語 / 1.66:1（ヨーロッパピスタ） / カラー / 5.1ch / 日本語字幕

足の悪い老人、キム・ホックは、長年妻に頼って生きてきた。夫婦は台北郊外の古い家に暮らしている。妻が突然亡くなると、キム・ホックはその事実を隠し、一見平穏な生活を送り続ける。しかし、長年疎遠だった息子とそのパートナーが突然現れたことで、彼は妻の死と向き合わざるを得なくなる。全編、スーパー16ミリで撮影されたという独特な画調と、静かで緩やかなリズムが心を打つ。

### 監督/プロデューサー：ワン・ピンウェン（TT2019修了生）

1987年、台湾・台北生まれ。国立政治大学ジャーナリズム学科を卒業後、ロヨラ・メリマウント大学にて映画・テレビ制作の美術修士（MFA）を取得。

主な監督短編映画に『Between Us』（2014）、『Labyrinth』（2016）、『軍犬（Military Dog）』（2019）などがある。

「Produire au Sud Taipei Workshop 2018」修了生。長編デビュー作となる『春行』（2023）で、第71回サン・セバスティアン国際映画祭 シルバー・シェル賞（最優秀監督賞）を受賞した。



### 上映スケジュール

11月7日（土）10:20- \* Q&A：ワン・ピンウェン監督

11月8日（日）15:50- \* Q&A：ワン・ピンウェン監督

## 『沈黙の自叙伝』（2022）



©2022. Kawan Kawan Media, In Vivo Films, Pōtocol, Staron Film, Cinematografica, NiKo Film

2022年 / 115分 / インドネシア、ポーランド、ドイツ、シンガポール、フランス、フィリピン、カタール / インドネシア語 / 2.35:1（シネマスコープ） / カラー / 5.1ch / 日本語字幕

青年ラキブの父は刑務所に、兄は海外に出稼ぎに出ている。彼はインドネシアの田舎町で何世紀も一族で仕えてきた退役した将軍プルナが所有する空き屋敷で、たった一人の使用人として働くことになる。プルナはラキブに対して立場を超えたように親身に接し、父親代わりの存在となりつつあった。ラキブ自身もプルナのアシスタントとして、仕事と生活の中で天職を見出す。そして、地元の首長選挙に立候補した将軍の選挙キャンペーンが始まり、二人の運命も大きく動き出す。

### 監督：マクバル・ムバラク（TT2025修了生）

インドネシア出身の映画監督・脚本家。

5本の短編映画を手がけたのち、2022年に『沈黙の自叙伝』で長編監督デビュー。第79回ヴェネツィア国際映画祭で世界初上映され、国際映画批評家連盟賞（FIPRESCI賞）を受賞。第23回東京フィルメックスでもグランプリを受賞したほか、第95回アカデミー賞国際長編映画賞部門のインドネシア代表作品に選出された。

現在は長編第2作となる『WATCH IT BURN（原題）』を準備中（「タレンツ・トーキョー2025」参加企画）。



### 上映スケジュール

11月6日（金）16:30- \* Q&A：マクバル・ムバラク監督、ユリア・エヴィナ・バラプロデューサー

11月7日（土）12:45- \* Q&A：マクバル・ムバラク監督、ユリア・エヴィナ・バラプロデューサー

## クロストーク

### 「作ること、映すこと」

「タレンツ・トーキョー」×「恵比寿映像祭」による特別企画

映画監督・小田香氏（TT2015修了生）と、プロデューサー・曾我満寿美氏（TT2011修了生）、モデレーターに清水裕さんをお迎えし、「タレンツ・トーキョー」×「恵比寿映像祭」による特別企画のクロストークを開催します。

「タレンツ・トーキョー」での学びが現在の創作活動にどう結びついているのか。監督とプロデューサー、それぞれの視点から映画制作の舞台裏や創作の難しさに迫ります。さらに、小田氏が参加した東京都写真美術館で開催されている恵比寿映像祭でのコミッション・プロジェクトの取り組みを紹介し、「映像制作」が持つ意味や、作品が観客へ届く形について、多角的な視点からお話しいたします。

日時：11月8日（日）10:30～

登壇者（敬称略）：

#### 小田 香（映画監督 / TT2015修了生）

1987年大阪府生まれ。フィルムメーカー／アーティスト。

代表作に『鉦 ARAGANE』（2015）、『セノーテ』（2019）、『Underground アンダーグラウンド』（2024）など。

恵比寿映像祭2025第2回コミッション・プロジェクトファイナリスト。

恵比寿映像祭2025コミッション・プロジェクトにて新作《母との記録「働く手」》を発表。

#### 曾我 満寿美（プロデューサー / TT2011修了生）

Spanic Films代表。フィリピン映画祭主催。アジアとの国際共同製作をプロデュース・配給。

日・マレーシア・フィリピン共同制作『ひとりで死ぬのはイヤだから』（2024）、日比合作『この場所』（2026）などを手がける。

MC（敬称略）：

#### 清水 裕（東京国際映画祭プログラマー）

映画上映者。ミニシアターのオーディトリウム渋谷のちユーロスペース勤務を経て、2017-2020年恵比寿映像祭映画担当。2022年恵比寿映像祭ゲスト・プログラマー。

2022年文化庁新進芸術家海外研修制度でロッテルダム国際映画祭に参加、2024年まで実験映像プログラムDINAMO担当として勤務。

2024年より東京国際映画祭の非アジア圏作品担当、加えて2026年ウィメンズ・エンパワーメント部門とユース部門の作品選定を担当。